

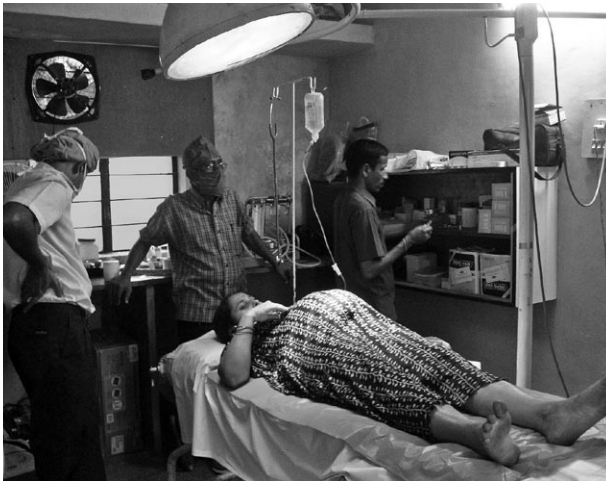
共同研究 ● リスクと不確実性、および未来についての人類学的研究 (2008-2011)

本共同研究の結成にあたっての問題意識と途中経過については、すでに『民博通信』131号において研究代表者の東賢太郎が報告している。本稿では、本共同研究で明らかにされてきた「リスク」概念の整理と、今後、文化人類学でそれをどのように取り扱っていくべきかという展望について述べたい。

「リスク」をどのように概念化するか

日常語としてのリスクは、文脈に応じて様々な意味を包含する。「危険、好ましくないことが起きる可能性、不安」などのニュアンスを持つ一方で、例えば、「リスクを取ろう」(英語の「take a risk」に近い)というとき、「冒険的企て」というポジティブなニュアンスが強くなる。こうした多義的な日常語の意味合いを多分に含みながら、リスクという言葉は、保険制度や食の安全性、化学物質の発がん性、あるいは、原子力発電所などの巨大工場の重大事故の可能性などをめぐる言説のなかで実に汎用的に使用される。こうした状況を、科学技術の進歩がまねいた予期せぬ危険に満ちあふれた社会、複雑に機能分化した多元的で不確実な社会として、または、個人の安全を確保する近代的な諸制度が崩壊した社会として、社会科学の中で「リスク社会」と形容するようになってからすでに久しい。リスクの人類学をめざす本共同研究は、「リスク」にまつわる諸問題がフィールドの中でどのような立ち現れ方をしているのか、ということについて文化人類学的精査を試みることを目的としている。「リスク社会」が地球規模の事象として起こりつつあるものだという時代診断を認めつつも、そこからやや距離を置いて「リスク」をめぐる事象を批判的に検討する作業を今日までに行ってきた。

「未来において不利益や損害が起こる可能性」としてのリスクは、その簡潔なテーゼとは裏腹に、対象化されるべき問題は大きい。研究会を通じて明らかにしてきたことは、大きく分けて以下の4つである。



インド村落の病院での出産風景。さらなる妊娠を防ぐため、出産後すぐに避妊手術を実施することが多い(松尾瑞穂撮影)。

第1に、「リスク」への意識は、未来が過去と現在の延長上にあるという時間認識のもとで、将来に不利益を被る損害を、現在の与えられた諸条件によって予期し、意思決定しうるものとして捉えるときに生じる。すなわち、リスクは、危険や不確実性と言い換え可能な意味で使われることも多いが、それらとは異なり(それらは付随する事象でありながらも)、未来に対する計算・制御(不)可能性や意志決定に伴う帰責を巡る運動を含み込むものとしてその輪郭が抽出できる。将来の不確実性や起こりうる危険についての認知的、あるいは、機能的対処への文化人類学の関心は、例えば、呪術論や生態人類学などの分野において一定の研究蓄積がある。しかしながら、我々は、むしろ、ルーマンやギデンズの議論を継承したうえで、「リスク」と危険や不確実性の名で表されるものを峻別することの重要性を認めるところからスタートする。つまり、危険や不確実性で表されていたものは、未来を科学的に計算・制御するための技術や制度の発達により、リスクとして可視化され、正当性を持って提示される。その一方で、そのようなリスクについての計算は、将来の危険や不確実性を遁減させるものとして機能するはずであるにもかかわらず、現実社会を見てみると必ずしもそうではない。なぜなら、リスクは、以下の2つの問題が根本に関わっているからである。その2つとは、「リスク」として提示される事象は、現在において未来のことを完全に知りえることはないという意味において、原理的に解決不可能であるということ。そして、そのことの帰結として、「リスク」の帰責問題をめぐる争いが激化したり、合意を見いだす中で、「リスク」という問題に対処すること自体が、より問題を複雑化させる。あるいは、さらなる「リスク」を生み出すということである。

第2に、「リスク」の実在性に関わる問題である。上記の議論に従えば、リスクの人類学が対象とするのは、リスクを認識しそれに対処するという、現在を起点とした過去と未来をつなぐ一連の動き——リスク化とも言うべき運動——として捕捉されるべき事象である。この意味で、リスク・ファクター(天災、戦争、疫病、化学物質汚染、交通事故、金融危機等)の量的な多寡や増減自体が問題なのではなく、むしろ、あらかじめ予測される損害を計算し、その帰結を、誰かが行った決定として帰属させるという指向性が高まっていること、そして、それらに対する新たな対処の仕方(例えば「合理的」な意思決定)が現れていることに注目する。つまり、リスクとは、必ずしも、専門家ですら制御できないような科学技術がもたらす脅威、例えば、原発事故と膨大な種類の有害物としてのみ実在するものではない。人々にますますリスクを強く意識させるような認識的状况が形作られ、そうした中で、新たな「リスク」が続々と発見され問題化されていく。その意味で、「リスク」は常に作られ続けている。付け加えておかなければならないのは、リスクは認識の仕方に関わるものだと主張しているわけではないということだ。リスクを可視化する装置の

増大と人々や制度のリスク回避・管理意識の変化は相互強化関係にある。

第3に、上記の文脈において、現在における人々の行為は(本人が意図する／しないに関わらず)、リスクに対処する意志決定行為として見なされることを意味する。ここで含意されていることは、文化人類学がこれまで対象としてきた半ば無意識で行われているとされる慣習や実践は、リスク化の過程において、それらとのずれや接合を生み出すものとして照射されるということである。特に、新自由主義的政治経済システムにおいて、リスク管理が個人の自己責任として任されてしまうことへの違和感は、本共同研究の出発点の1つであり、これは次の第4の意図にもつながる。つまり、各フィールドの事例研究を通して、「リスク」をめぐる実践に—あるいは、フィールドの人々の未来の処し方とも言い換えられるかもしれない—、オルタナティブとなりうる思考や実践をすくい取ることを意図している。例えば、筆者がテーマとしている、アメリカで誕生したファット・アクセプタンス運動は、

体重を健康の指標とし、太っていることを「逸脱」としてとらえる公衆衛生やメディアなどに対し、異議申し立てをしている社会運動である。運動の力は、肥満は将来の健康に悪影響を及ぼすという我々の「合理的」思考をずらしていく可能性を持っている。

「リスク」をめぐる諸問題は、文化人類学に限らず学問領域の垣根を越えて展開されるべきものである以上、本共同研究では領域横断的な研究会を心がけている。2010年度の研究会では、政治学者の日下渉に「フィリピン政治と都市貧困層」について、また、社会学者の加藤源太郎には「リスク論を市民社会論に転化させることの危険性」について論じていただいた。

成果公開

以上の視座を共有した上で、各メンバーの研究報告は、フィールドで生起する実に豊かな事例を提示してくれることが分かる。最終である2011年度で4年目を迎える本共同研究は、成果公開に向けた3部構成からなる本を執筆中である。本の構成と位置づけは以下のものである。

第1部「リスク・コンシャスな主体(仮)」:ここでは、人々の生活世界にリスクが侵入する—裏を返して言えば、人々がリスク・コンシャスな主体として立ち上がる、その動態とメカニズムを描き出す。取り上げる予定の事例は、市野澤潤平によるレクリエーション・ダイビングの事例、松村直樹のバングラデシュ飲用水砒素汚染問題の事例、渡邊日日による航空事故とコミュニケーション・リスク、林勲男による豪雨災害リスクと避難行動についての事例が含まれる。

第2部「技術制度としてのリスク(仮)」:技術・制度としての「リスク」を丹念に追うことを通じて、リスクがいかに「合理



ファット・アクセプタンス運動に関わる活動家が開発した「Yay! Scale」。体重計を解体し、数字を取り除き、「セクシー」や「すてき」「魅力的」などの称賛の言葉に入れ替える(碓陽子撮影)。

性」を帯びるかを明らかにし、それによって、批判の契機を見出すことを目指す。木村周平によるトルコの地震、新ヶ江草友による日本におけるHIV/AIDSの疫学研究、松尾瑞穂によるインドの産児制限、吉井千周による法とリスクについての論考が含まれる。

第3部「『リスク社会』へのオルタナティブ(仮)」:第1部、第2部の議論を踏まえながら、「リスク」という概念や思考、またそれに付随して生じる生活世界のリスク化、あるいは「リスク社会」の諸問題について、そのネガティブなインパクトを明らかにした上で、それに対抗する、あるいは、オルタナティブとなりうる思考や実践の可能性を模索する。東賢太朗によるフィリピン社会の無職と出稼ぎについての事例、西真如によるエチオピアの葬儀講活動にみる保険と連帯、飯田卓によるマダガスカル島の漁撈社会、碓によるアメリカ社会のファット・アクセプタンス運動が含まれる。

現代社会のフィールドで生起する様々な状況を「リスク」という名において浮かび上がらせようとする本共同研究は、毎回、事例と学説を行ったり来たりしながらの思考力鍛錬の場として、メンバーに刺激をもたらしている。残り少ない研究会で、我々の議論をさらに発展させていくつもりである。

いかり ようこ

東京大学大学院総合文化研究科大学院生。専門は文化人類学。アメリカ社会の「肥満問題」について調査研究を行い、現在は、博士論文を執筆中。